

飲水思源

自動車販売のリーダー

菊池武三郎伝

7

当時の市議会議員は名譽職的色彩が濃く、それだけで生計を立てることは困難だった。菊池武三郎は奈良市議時代に、再び豊国自動車に勤め始めた。

当分のポストは販売企画主任だったが、得意のアイデアマンぶりを発揮する。例えば、巡回サービス班。メカニックを同行してユーザーを訪問し、車の点検、修理をして回った。また、ゼネラルモーターズ(GM)が経済性を前面に「36年式新型シボレー」を売り出

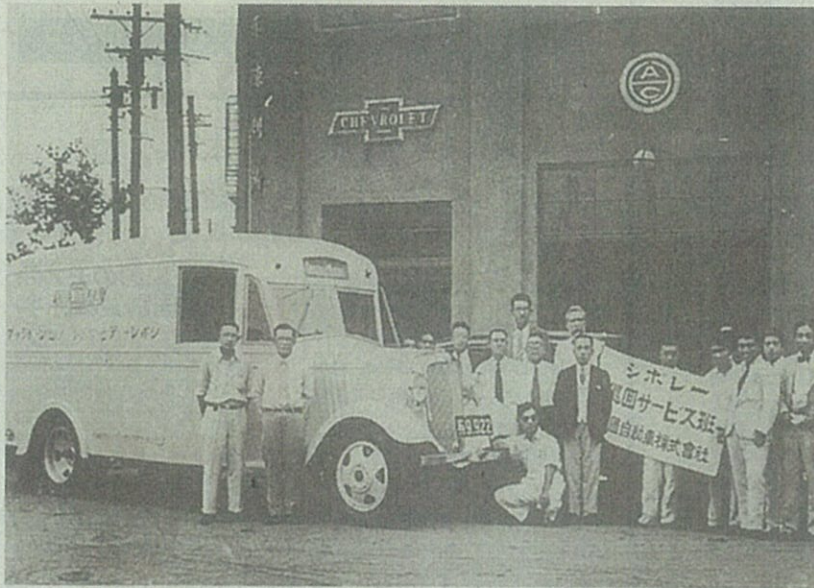
した際には、実際に経済性を確かめてもらうために路上公開テストを企画。大阪―宝塚間でガソリン消費量の実地テストを行い、話題となった。

武三郎が8年ぶりに勤めた同社は、主力のGM車に加え、新しくできた日産の小型四輪「ダットサン」の関西総代理店として、その販売にも力を注いでいた。

ダットサン登場の歴史は、日本産業や戸畑鋳物

の社長だった鮎川義介に始まる。鮎川は日本の工業発展のために自動車工

隠忍の時代



菊池武三郎が企画した巡回サービス班 (左端が武三郎)

業に着目。小型車の製造の部品的大量生産を行うとフォード、シボレー車た。その間に自動車製造

の技術を習得して基礎を確立。外国車に対抗でき、12年には「日支事変」が勃発した。この頃、

2度目の豊国自動車

日本の軍部は国産自動車の開発に力を注ぐ。自動車製造事業法が11年に立法化されたが、これは国産車の開発に立ち上がった日産とトヨタに対する国家的援助、便宜供与の法だった。

る車を国内で製造する計画を立てた。昭和6年に新小型四輪車の生産車第1号を完成させ、販売店として東京にダットサン自動車商会を創設。7年には、大阪の豊国自動車で販売を始めることとなった。

そうした流れの中で、武三郎は2度目の同社の時代に、ダットサンの販売から日産とつながり、奈良で日産自動車のディーラーとなるチャンスをつかむのである。10年前後は、日本は苦悶の時代だった。11年には「二・二六事件」が起

る理由がある。広大な大陸での戦争は兵員、物資の輸送をトラックに頼らなければならなかったが、トラックは米国のフォード、シボレー製。開戦となれば米国は対日自動車輸出を禁止するはずで、自国での生産が急がれていたのだ。

(文中敬称略)
11つづく、毎週金曜日掲載